

看護職部門

看護職部門 優秀賞

気持ち受けとめて

いぬづか くみこ
【静岡県・犬塚久美子】

「ばあちゃん、またガラクタを集めて、いい加減にして」。

面会にきたお嫁さんの鋭い言葉が病棟に響きました。認知症を患っている患者さんは急いで風呂敷包みを抱え、形相を変えて廊下の隅にうずくまりました。

私はその成り行きを見ていました。風呂敷包みを離すまいと必死で抱え込む患者さん。何とか包みをほどこうとするお嫁さん。争いは激しくなるばかりです。仲裁に入ろうとした時です。

「ヨシさんはガラクタではなく、大切な思い出を風呂敷に包んでいるのです。何とか大目に見てくれませんか」

凜とした落ち着いた声を出したのは、新人看護師でした。私は一瞬戸惑いました。「仕事がうまくいかないの、看護師を辞めたい」と本人から相談を受けていたからです。

ヨシさんはほっとしたようでした。

お嫁さんは苦虫をつぶしたような表情で、

「いつもそう言って取っておくから、くだらないもので家がゴミ屋敷になっているのよ、あんたにわかるの」

「新人が偉そうなことを言ってすみません。私の祖母が『人は思い出とともに生きる』と教えてくれました。これはヨシさんの大切な思い出の品だと思ったのです」。

お嫁さんが立ち去った気まずい雰囲気の中で、ヨシさんが「ありがとう」と言いました。

少しの時間が過ぎた後、家族が帰ったエレベーターの前に一人の患者さんが長い時間、立ちつくしていました。「一緒にお家に帰りたかったですね」。肩を抱いて声を掛けたのもその新人看護師でした。エレベーターを見つめて目に涙をためていました。

「息子に捨てられた」

「息子さんも帰るのはつらかったと思います」患者さんはうなずきました。

「また会いに来てくれるといいですね」

「昔はいい息子だった」

「お部屋に行きますか」

患者さんと歩調を合わせる姿に優しさがにじみ出ていました。

人一倍、患者さんの気持ちがわかるのだから、きっと看護師続けられるよ。